



私の歩んだ道

藤原 作平*

はじめに

この原稿の依頼を受けて、いささかためらいがあった。というのも私は、通常の人とは、だいぶ異なるところがあり、私の歩んできた道というものは、若い人たちにはまったく参考にならないと思うからである。しかし、これまで私を支え、導いてくれた方々に感謝の気持ちをささげながら、自分の半生をふりかえってみるのも、今の自分にとっては意味あることと思ひ、ありがたく引き受けることにした。

私の生い立ち、小学校時代

昭和26(1951)年3月、兵庫県高砂市で生まれた。加古川の河口に位置し、現在人口9万人ほどの小さい町である。JR山陽本線沿いには、この地名の駅はなく、山陽電鉄という私鉄で、姫路、明石の両市と結ばれている。謡曲「高砂」の舞台であり、百人一首に「高砂の尾上^{おのゝ}の桜咲きにけり外山^{とやま}の霞たたずもあらなん」と詠まれた土地である。気管支喘息があり、父母と母の妹である叔母に大事に育てられた。とくに叔母は、喘息発作をおこすたびに、背負って病院に連れていってくれた。海岸にはきれいな砂浜があり、小学校時代はまだ埋め立てられておらず、海水浴を楽しむことができた。

物心がついたころは、まだ戦争の影が色濃く

残っていて、正月には傷痍軍人が白装束で、アコーディオンを奏で、金銭を無心する立姿がよくみられた。みかん箱に針金をかけて布で作ったカーテンを吊るし、本棚にしていた。小遣いをためて、宇宙の本を買って読んだりしていた。父は、高等商業高校しか卒業していないサラリーマンであったが、数学が好きで、余暇には、数学の本を開いていた。

中学・高校時代

姫路の私立の淳心学院という男子校に通学した。当時は塾などない時代であったが、英語は父が教えてくれた。することが遅く、よく段取りが悪いと指摘された。

大学受験の際には、理学部を目指そうと思ったが、父から経済的に苦勞する可能性があるといわれ、医学部にも基礎医学というものがあることを知り、医学部を選んだ。高校3年のときは、大学闘争が最高潮の年で、多くの大学がバリエードで封鎖され、1969年1月には安田講堂の攻防戦があり、東大の入学試験が中止された。確か神戸大学も、ほかに受験した大学も機動隊に守られながらの受験であったように記憶している。

大学時代

大学は封鎖されたままで、入学式もなく、6月ごろ全学集会があったくらいで、9月から講義が開始された。講義が始まって、政治をどう

*Fujiwara, Sakuhei(前 大分大学皮膚科教授)
大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学客員教授
(〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町1-4-3)

考えるか、大学とはどのような学問をするところか？ といった議論が続き、産学共同研究も、企業寄りの学問は自由研究を阻害するとの考えから、これを排除しようとする風潮があった。学生時代初期からこのような政治や政府に対する批判的精神に触れたせいか、ずっと後、2004年に臨床研修が制度化されたときも、インターン制度の復活のようにみえ、国主導の改革には、常に懐疑的な立場をとるようになった。大学闘争は2~3年後には急速に衰退して、批判的な意見を述べたり、議論することなども行われなくなっていった。2年生後半からは、基礎系のよい先生に恵まれ、とくに西塚泰美(生化学)、溝口史郎(組織・発生学)、京極方久・杉山武敏(ともに病理学)の各先生には、刺激を受けた。西塚先生の講義は、生化学の歴史で、どういうデータからその結論が導かれたかという点について年代を追って話をされた。アメリカでは出身大学には関心がなく、今何をやっているかがもっぱらの関心事で、食堂での昼食時に隣の人同士で活発に議論する、質問はシンプルなほど良い、などの語録を学び、自然に生化学への憧れが植えつけられていった。溝口先生は丹精込めた組織標本作りをされ、実習、口頭試問は厳しかったが、ドイツ語研究会の顧問でもあり、接する時間が長く、深く教えを受けた。大学院、ドイツ留学時代を通じて、博物館を案内していただいたり、現在も住まいが近くにあることから、毎年夏に一度はお目にかかって、解剖学・発生学・ボロブドールやサンチーの仏跡に関する個人講義を受けている。進路については、父は大きな診療科に進んで欲しかったようだが、6年生のときにさんざん迷い、自由時間が多いと外見上は思われた皮膚科を選んだ。当時は細胞内情報伝達、内分泌学の研究が盛んで、この方面には多くの人材が集まっていたが、細胞外に関する学問はまだ黎明期だったため、結合組織を研究していた皮膚科に進むことにした。

卒後から大学院時代

皮膚科研修の前に全身管理の方法を学ぶため、



著者近影

3, 4年次学生のときに見学させていただいた関西労災病院内科の勝 仁部長に頼みこみ、2年間の研修をさせてもらった。当時この内科は専門科ごとに分かれていなかったため、総合内科臨床の基本を学ぶことができた。

この研修期間中に、佐野榮春教授が神戸大学から大阪大学へ転任され、三島豊教授が赴任され、教室のテーマが変わってしまった。そのため、学生時代に面識のあった新海滋先生の勧めで、結合組織の基礎的研究を行っていた東京医科歯科大学難治疾患研究所の永井裕教授の大学院に入学した。1年目は、杳太郎や漱石が住んだという文京区西片町に下宿した。

基底膜のコラーゲン構造の解明が研究テーマであったが、当時その α 鎖は一種類か、多種類かという論争があった。出発材料の腎の糸球体基底膜を得るところから難渋した。最終的には、腎全体をすりつぶして食塩の分別沈殿で基底膜のIV型コラーゲンを抽出することができたが、I型、III型コラーゲンなどとは異なり、ペプシンで限定分解を受けるため解釈に苦労した。この基底膜コラーゲンの研究を通じて、複雑そうにみえても、実際の自然現象は単純であるということを学んだ。なぜという質問や自分自身の言葉による質問の大切さを教えられた。さらに、教授を越えて初めて学位に達する、論文は批判的に読むこと、学会では発言をするようにとも教えられた。なんとか御茶の水医学雑誌の論文で学位を得たが、もう少し基底膜研究を続けた



2002年6月16日に大分で開催されたサッカー・ワールドカップのスウェーデン対セネガル戦(決勝トーナメント1回戦)を観戦中のTimpl博士、翌年10月に67歳で急逝された。

いと思い、ドイツ学術交流会(DAAD)の奨学生に応募し、ラミニンの発見など基底膜構造について精力的に研究していたマックス-プランク生化学研究所(ミュンヘン郊外)のRupert Timpl博士のもとへ留学した。

西ドイツ留学時代

Timpl博士(当時45歳)の研究室は、私を含めて博士研究員が4人、実験助手は2人と小規模であったが、大きな成果(たとえば、IV型コラーゲンのスパイダーモデルのきっかけとなった7Sコラーゲンやナイドジェンの発見)をあげていた。しかし2 mを超える蛋白分離用クロマトグラフィーが年間1,000回ほど流れ、実験量は豊富であった。私はマウスに移植された基底膜産生腫瘍(EHS腫瘍)からヘパラン硫酸プロテオグリカン(現在では、パールカンの断片と考えられる)の精製を行った。ここでは、共同研究の大切さを学んだ。さらにヨーロッパの学位は数報の論文を1つの冊子にまとめて、学位申請をするため、自分はまだ外国の学位の水準にまでは達していないと強く感じた。もう1つ思い出に残っているのは、特別講演に来られた京都大学生化学の沼正作先生を宿泊先のゲストハウスに訪ねた際に、「是非分子生物学をやりなさい」と説か

れたことであった。それがずっと心に残り、大分での仕事につながった。そこで2年半を過ごして、昭和59年3月に帰国したが、就職先がなく、4月から妻の所属先であった神戸大学の第二内科に医員として採用してもらった。しかし結合組織の研究をしたいという思いは強く、翌年高安進先生、新海先生のおられる大分医科大学の皮膚科へ、2歳の娘と妻を神戸に残して、単身赴任することに決めた。

大分医科大学時代

大分に赴任してから、やっと皮膚科に接することができた。高安教授は、自分の部屋の電話(市外通話料は校費で支払われる)はいつでも使ってもよいといってくださり、たいへん嬉しかったのを覚えている。同時に入局した大分医科大学2期生の片桐一元先生(現 獨協医科大学越谷病院教授)、橋本裕之先生(現 アルメイダ病院形成外科部長)らとともに、Lever's Histopathology(7版)を読んだうえで、実際の病理組織標本の所見を述べるという指導を、週一度1年間にわたって高安先生から受けた。大分医科大学創設時から板見智先生(現 大阪大学皮膚毛髪再生医学寄付講座教授)がおられ、私の入局の次年度に寺師浩人先生(現 神戸大学形成

外科教授)が形成外科医を目指して入局してきた。それぞれの興味は異なったが、ほとんどの医局員が夜遅くまで仕事をしていた。新海先生とは、結局8年しか一緒に仕事をしなかったが、実験が夜2時ごろまで及ぶことは普通で、新海先生も単身赴任だったため、よく助教授室に寝泊まりされていた。進取の気風に富み、心底研究が好きで、実験の勘所をとらえることも上手で、1回で実験を成功させていた。科学研究費Bも取得されていたが、研究費は潤沢ではなく、それでもくじけなかった。

基底膜はPASで陽性に染色されるが、その糖鎖構造は不明だったため、ラミニン、ナイドジェン、IV型コラーゲンの糖鎖構造を、木幡法^{こばたほう}(³H標識したオリゴ糖を、グリコシダーゼによる逐次分解後、そのサイズの減少をクロマトグラフィーで測定する方法)で、解析した。しかしこれらの各成分は、EHS腫瘍から抽出されたもので、ヒトの皮膚由来のものでなく、糖鎖機能は解明できなかった。ずっと後の2015年に島根大学の千貫先生らが、牛肉のラミニン、ナイドジェンの α -galactoseがアナフィラキシーの抗原であると発表され、そこに自分の論文が引用されているのをみたときはたいへん嬉しかった。久留米大学の前々教授の笹井陽一郎先生に、もう少し臨床的な研究をしてはどうかと勧められたこともあり、当時未解明であった水疱性類天疱瘡抗原の解析に乗り出した。しかし、すぐに良い成果には結びつかず、そのため3回ほど、開業の場所を求めて、妻と一緒に暑い夏の神戸を歩いたこともあった。

きっかけは、1992年ごろであったと思うが、ジョゼフ・マーフィーの書いた『あなたは必ず成功する』(マーフィー理論研究会編、(株)産業能率大学出版部)という一冊の本であった。潜在意識こそが人間行動を支配し、切に望めば必ず潜在意識がそれを実現するというものであった。それまで、いつも自分は失敗するのではないか？ 自分の出すデータに不安ばかり抱いていたが、それをきっかけに、自分の否定的な考えや行動(悲観脳rainy brain)を払拭できるように

なった。

当時、水疱性類天疱瘡の自己抗原は1種類か、それ以上存在するかという論争があったが、このとき、過去のIV型コラーゲンの研究が役立った。蛋白質分解酵素阻害薬とともに表皮を抽出し免疫プロットを行うと、主たる抗原は2本のバンドに集約された。さらに免疫プロットを行っていると、BP230, BP180とは反応せず、高分子の蛋白質とのみ反応する患者血清がみつかった。この症例は、85歳の男性で、臨床的にも、病理組織学的にも表皮下水疱で、好酸球が多数浸潤し、通常の水疱性類天疱瘡と異なるところはみられなかった。この分子の同定には約10年近くかかったが、分子量500 kDa程度で、プレクチンとは類似しているものの、未報告の分子であるため、表皮由来のプラキン分子という意味で、エビプラキンと名づけた。このノックアウト・マウスは通常状態では表現型を示さず、創傷治癒過程では、野生型、ヘテロマウスよりわずかに治癒が速くなるのみであった。なお、この分子の長さは、個人によって異なっており、現在それを解析中である。

大分大学時代

2001年に教授に就任してからは、私の分野の大学院生の指導は、ほとんど生化学の吉岡秀克教授に任せっきりで、間接的にしか指導しなかった。臨床については、すべての症例を報告するぐらいの気持ちで、文献を調べたうえで、特異な点を探し出し、報告するよう若い人たちに勧めた。助教授時代までは、私自身たいへん遅筆であったが、教室の責任者になってからは、締切日を設定し、督促するようにした。しかし多くの症例が未報告のまま残った。その中で3人の留年学生の指導にあたり、1人を国家試験まで合格させることができた。卒業試験やCBTに何度も通らないこれらの学生の指導を通じて、教室員に少し優しく接するようになったように思う。それでも退職までは、人を指導する際はずいぶん焦りがあった。

退職後、最近考えていること

2016年3月に退職し、部屋が大荒れの状態であったが、まず宿舍の片付けを4月20日までに済ませ、中断を挟みながら、大学の部屋も片付けて、2017年2月8日の夕方、フェリー・サンフラワーで大分をあとにした。神戸―大分間を往復する31年に及ぶ旅生活のあと、神戸の一隅にやっと落ち着くことができ、それからもう8カ月以上が過ぎた。片山一郎大阪大学教授と鶴田大輔大阪市立大学教授のおはからいによる週2回の非常勤勤務と、週1日のカンファレンス参加で、かろうじて脳の劣化を防いでいる。現在、地方と都会における臨床、研究、教育の違いや、利点・欠点などを、改めて考え続けている。

幼少期から病弱だったため、大学生のころまでは、自分の寿命は40歳くらいと思っており、自然に死生観に興味をもった。これは信仰心が篤く大学3年時に他界した母の影響があるかもしれない。私が医師になったばかりのころは病名告知ということはあまり行われなかったが、告知の有無にかかわらず、患者さんは、自分の命が長く続くかどうかは、自分で察するものだということを悟った。私は癌ですか？と尋ねられたときには、口頭では否定せず、心の中で肯定しながら黙って手を握ること（「無言の告知」と勝手に名づけていた）を行ったりした。この死生観が、普遍的なこと、不変なものは何な

のかと常に考える基礎となっていたように思う。

教育について、今あらためて振り返ると、本来求めてはいけな^{げんせりやく}い現世利益を現役時代は求めていたように思い、それが人を指導する際の焦りにつながったのではないかと考えている。現時点でわからないことこそ大学は教えるべきであるという考えも、現役時代は実行できなかった。学部教育でそんなことに注力すると国家試験にも通らなくなるのは自明であるが、研修医、大学院教育においては、未解明の領域は何かを教えることも、重要なことと思う。

牛歩のような自分が、よくここまで歩んでこられたと思うが、これは今まで多くの人に導かれ、助けられてきた賜物と思っている。加えて私がたどった時代は、現在よりゆったりとして、日本も上り坂の時代であり、経済や効率至上主義の影響を、わずかしか受けなかったためかもしれない。たとえわが国の経済成長が鈍化しても、学問は発展し続ける分野である。わくわくしながら日本の皮膚科を発展させてくれる若い人が、地方からもどんどん現われることを願い、そんな活力あふれる人と今後議論することができれば、本当に嬉しいと思う。と同時に現在もなお知的活動が続けられる師や先輩を見習い、自分の体力、気力の続くかぎり、学びの連鎖に加わり続けたいと思っている。

